

論文の内容の要旨

論文題目 我らが大地——19 世紀イスパノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写

氏名 花 方 寿 行

本論文で取り扱うテーマは、副題にあるように、「19 世紀イスパノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然」である。本論文では、個々の作家・作品分析においては近年活発に発表されているナショナリズム・ポストコロニアリズム研究に連なる先行研究を利用しながらも、それをよりダイナミックなアーカイヴ形成の流れの中におくことで、その文学史的な重要性をより明確にしていく。

本論文においてはそのため、2 つの通時的な変化を縦軸としながら、個々の作品の自然描写を論じてゆく。まず第 1 は、19 世紀初頭の植民地時代末期から、独立戦争期を経て、各国別の国家体制がほぼ確立する 1840 年代に至る期間においての、イスパノアメリカにおけるナショナル・アイデンティティの変化である。これによってスペイン本国・旧大陸との差異は意識されながらも、帰属すべきネイションの範囲も形態も明確ではなかった時代から、新興イスパノアメリカ諸国がネイションの枠組みとして自明のものとする時代への変化が、いかに各作家の言説に影響を及ぼしているかが明らかにされる。そして第 2 は、新古典主義的なパラダイムに属する知の表現からロマン主義時代における主観的な認識過程への、欧米文化圏における視覚に帰せられた役割の変化であり、その影響を受けて各作家による自然の視覚的な描写がいかに変化してゆくかを明らかにする。そして本論文

では、この一見全く関係のないように思われる2つの変化が、いかに緊密に結びつきながら19世紀前半のイスパノアメリカにおいてネイションと自然に関する言説を作り上げていたかを論じてゆく。

本論文の構成は以下の通りである。まず第1章では18・19世紀イスパノアメリカおよびヨーロッパの思想史的・文化史的状況を紹介し、本論文で分析のために用いる思想的枠組を明確にする。第1節ではアンダーソンやチアラモンテを援用しながら、18・19世紀イスパノアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ形成とその特徴を明らかにする。第2節では主として18世紀ヨーロッパにおけるナショナル・アイデンティティを形成する条件としての自然観と、そのイスパノアメリカへの影響をまとめる。第3節では18・19世紀ヨーロッパ文化における自然への関心と、視覚文化の流行、それに伴う文学における視覚的自然描写の隆盛について述べる。そして第4節ではフーコー、サイードらの議論を前提に、ナショナル・アイデンティティの形成と文学や美術における自然描写がどのように結びつき機能しているかを、19世紀アメリカ合衆国の場合を例に示した後、イスパノアメリカ文学においても行われたこの結びつきがいかなる問題を内包しているかを指摘して、後の作品分析につなげる。

第2章と第3章は、それぞれ、イスパノアメリカ独立期を代表する3大詩人のうち、特に自然を扱った作品で知られる、ベネズエラ出身のアンドレス・ベリヨと、キューバ出身のホセ・マリーア・エレディアの一連の作品を論ずる。両者の作風は異なるが、共にスペイン支配体制下で新古典主義的教育を受けて育ち、長じてからロマン主義に接したこと、またイスパノアメリカ独立運動が高まりを見せ、先陣を切った国々が独立を達成するのを同時代的に体験したことにより、自然描写の意義とイスパノアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ、双方が大きく変わってゆく状況を反映しているという共通点を持っている。

第2章ではまずベリヨの詩作品を論ずる。第1節では「詩神への誘い」のマニフェストとしての重要性とそこでの自然の扱い方の新しさを、独立戦争以前のベリヨの作品「アナウコ川」と比較しながら明らかにする。第2節ではより文学的に完成された形で独立戦争後の国土再建プロジェクトの提言と自然描写を一致させた「熱帯地方の農業に捧ぐ」を論じる。第3節ではシモン・ボリーバルに代表される汎アメリカ主義的な活動が行き詰まり、各国別のナショナリズムが成立するようになった時代に書かれた『亡命者』の自然描写を分析し、それまでの作品では同時に成立していた汎アメリカ的なアイデンティティと地域

に根差したアイデンティティが分裂し、新たに成立した国家を単位とするナショナル・アイデンティティが確立されるようになったことを確認する。

第3章ではエレディアの詩作品を論ずる。第1節では祖国キューバ以外のアメリカの自然を扱った代表作「 Cholera 神殿にて」「ナイアガラ」での、視覚的な自然描写の新しさを論ずる。第2節ではキューバへの望郷や政治的独立への思いを謳った作品における自然の扱いを論じ、それが多くの場合視覚的な描写ではなく、祖国のシンボルとしての言及にとどまっていることを指摘する。一方政治的なコンテキストがなく、ロマン主義的な内面吐露と結びつけられている場合には、キューバの自然がそれと明示されることなく視覚的に描かれていることも明らかにする。第3節ではそのようなエレディアにもベリオの生み出したディスコースが影響を及ぼしたことを、「メキシコ学院開校式にて」の分析によって明らかにする。

第4章と第5章は、共にアルゼンチンのロマン主義を代表する作家、エステバン・エチェベリーアとドミンゴ・ファウスティーノ・サルミエントが、スペインからの独立はいち早く達成したものの、国内における政治的対立を克服する必要性に迫られたアルゼンチン知識人として、国内の敵対勢力をどのように表象し、ディスコース上で「国内」に統合しながら、パンパをアルゼンチンを象徴する自然環境として提示するに至ったかを分析する。第4章では先住民との抗争を描いたエチェベリーアの長編詩「虜囚」を論ずるが、第1節ではまず、アルゼンチンにおける対外的ナショナル・アイデンティティ形成の早さと、エチェベリーアらが直面したロサス独裁政権下における統合的アイデンティティ形成の必要性についてまとめる。続いて第2節では、「虜囚」を収録したエチェベリーアの『詩集』序文から、彼の「国民文学」創出への明確な意思と、そこにみられるネイション観がいかにかベリオやエレディアのものとは異なり、新たに独立したイスマノアメリカ諸国家を前提としたものとなっているかを明らかにする。第3節では「虜囚」前半部における先住民とパンパのオリエンタリズムに即した表象の意味を、国内の敵対勢力とみなされた先住民の殲滅という政治的プロジェクトとの関連から論じ、第4節では後半部における主人公たちのパンパ彷徨に伴う自然描写を分析しながら、パンパが植民活動によってアルゼンチンに国土として編入されるべきフロンティアとして描き出されていることを明らかにする。

第5章では両義的な要素を含みながらもガウチョを批判対象としたサルミエントの主著、『ファクンド』を分析する。第1節で『ファクンド』の構成と基本的な構想について紹介した後、第2節ではまず『ファクンド』第1章に注目し、国土によって国民性が形作

られるという環境決定論を前提に、サルミエントがいかにしてパンパとその住民たるガウ
チョを征服されるべきオリエン的な対象として描きながら、その独自性をアルゼンチン
のナショナル・アイデンティティの基盤として称揚する方向に転じているかを論じ、さら
に『ファクンド』第5章以降でそれがいかに具体的に展開されているかを明らかにする。
第3節では、『ファクンド』第2章の分析を通して、アルゼンチン「国民文学」を成立さ
せる材料としてのパンパおよびガウチョへのサルミエントの関心と、その政治的ディス
コースとしての機能を論じ、さらに『ファクンド』第5章以降で、いかに視覚による対象
の支配というフーコー的な機能がブエノスアイレスによる中央集権的な地方支配確立とい
う政治的プロジェクトと結びつくように用いられているかを明らかにする。

終章では以上の各章において論じてきた19世紀前半イスマノアメリカにおける変化を、
政体の変化、ナショナル・アイデンティティの変化、視覚的自然描写の変化のそれぞれに
整理してまとめ、ベリヨからサルミエントにいたるディスコースが19世紀半ばには広くイ
スマノアメリカ全体で参照可能な一つのアーカイヴを形成するに至っていたことを指摘
し、今後の研究の展望について述べてまとめとしている。